

仏教プログラム—「仏の覚りに導かれて」—

ぜひ、この機会に京都女子大学で「釈尊の教え」「親鸞の教え」を学んでみませんか？

人間は「生まれて」「老いて」「病にあつて」「死んで」いかねばならず、この「生老病死」が人生の根本苦であると仰ったのは、お釈迦さまであります。お釈迦さまは、この苦しみを乗り越えていく道、覚りへの道を、いろいろな人にあわせて、さまざまに説かれました。親鸞さま（1173～1263）は、それらの教えの中から、煩悩に振り回されている凡夫が覚りに導かれていく道を明らかにされたのです。

「なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり」

この言葉は、親鸞さまの語録を集めた『歎異抄』の言葉です。いつかは必ず離れなければならないこの世の諸々に未練があつて、どれほど名残惜しいと思つていても、この世の縁が尽きこの世の「いのち」を終えねばならない時には、仏の覚りの世界に導かれていくのであるという意味でしょう。煩悩を持ったままで、覚りに導かれていく凡夫の相（すがた）が表されています。

人生の行き先をしっかりと定めてこそ、生を全うすることができるのではないのでしょうか。

大学の講義だけではなく、仏教文化に触れていただく「見学・研修」プログラムも提供しています。